顕現後第 7 主日　ルカ 6 章 27―38 節

［直訳］

27 しかし　あなたがたに　私は言う　聞いている者たちに、
あなたがたは愛しなさい　あなたがたの敵を、
良く　あなたがたは行いなさい　あなたがたを憎む者たちに、
28 あなたがたは祝福を祈りなさい　あなたがたを呪う者たちに、
あなたがたは祈りなさい　あなたがたを悪く言う者たちについて。
29 あなたを頬において打つ者に　あなたは差し出しなさい　他方をも、
そして　あなたの上着を取る者から　下着をも　あなたは拒むな。
30 すべてのあなたに求める者に　あなたは与えなさい、
そして　あなたのものを取る者から　あなたは取り戻そうとするな。
31 そして通りに　人があなたがたに行うようにとあなたがたが欲する
あなたがたは彼らに行いなさい　同様に。
32 そしてあなたがたが愛している　なら　あなたがたを愛する者たちを、
どんな恵みがあなたがたに　あるか
そして　なぜなら　罪人たちは　彼らを愛する者たちを　愛している。
33 そして　［なぜなら］　もしあなたがたが善いことをするなら
あなたがたに善いことをする者たちに、
どんな恵みがあなたがたに　あるか
そして罪人たちも　同じことを　行っている。
34 そして　もし　あなたがたが貸すなら
その者からあなたがたが取ることを望むところの（者に）、
どんな恵みがあなたがたに　［あるか］
そして　罪人たちは　罪人たちに　貸している
ようにと　彼らは取り戻す　等しいものを。
35 しかし　あなたがたは愛しなさい　あなたがたの敵を
そして　あなたがたは善いことを行いなさい
そして　あなたがたは貸しなさい　何事にも絶望しないで。
そして　あるだろう　あなたがたの報いが　多く、
そして　あなたがたはあるだろう　至高者の子たちで、
というのは　彼は　親切で　ある
恩知らずの者たちと悪い者たちに対して。
36 あなたがたはなりなさい　慈悲深く
通りに　あなたがたの父が［も］慈悲深くある。
37 そして　あなたがたは裁くな、
そして　決してあなたがたは裁かれないだろう。

そして　あなたがたは罪に定めるな、
そして　決してあなたがたは罪に定められないだろう。
あなたがたは赦しなさい、
そして　あなたがたは赦されるだろう。
38 あなたがたは与えなさい、
そして　それは与えられるだろう　あなたがたに。
よい量りを　押し下げられ、揺すられ、溢れ出たものを
彼らは与えるだろう　あなたがたの胸の中へ。
なぜなら量りで　あなたがたが量るところのもので
それは量り返されるだろう　あなたがたに。

［新共同訳］

27 「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言っておく。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしなさい。28 悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。29 あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。30 求める者には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。31 人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。32 自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。33 また、自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあろうか。罪人でも同じことをしている。34 返してもらうことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあろうか。罪人さえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。35 しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。36 あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」

37 「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。38 与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、揺すり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤で量り返されるからである。」

①構成

ⓐ31節は一行目に関係副詞「通りに」に導かれた従属文が置かれ、二行目には命令形「あなたがたは行いなさい」が続く。行ってほしいと人に望む「通りに」、あなたがたも行うべきである。36節は一行目に命令形「あなたがたはなりなさい」が置かれ、二行目には関係副詞「通りに」に導かれた従属文が続く。父が慈悲深くある「通りに」、あなたがたも慈悲深くなるべきである。

ⓑ同じ構文で語られた31節と36節とを二本の柱として全体が組み立てられている。第一の柱では人間同士の関係が、また第二の柱では神と人間の関係が語られる。

Ⓒ点線の囲み罫で示した「愛する」は27―30節に一度、32―35節には五回繰り返される。これに対して、傍線の囲み罫で示した「与える」は27―30節に一度、37―38節には三度繰り返されて

いる。このことから考え、「愛する」と「与える」が全体のキーワードであり、両方の言葉が一度ずつ現れる27―30節は、テーマが提示される段落であり、続く32―35節で「愛する」ことが説明され、さらに36―38節では「与える」ことが説明される。

ⓓこのような構成が示すように、「愛する」ことは「与える」ということに具体化されるが、そのような人間関係を可能にするのは、神との関わりである。

②愛することと与えること（27―30節）

ⓐ27節の一行目で、イエスが語りかける「あなたがた」が「聞いている者たち」と説明されている。聖書での「聞く」は「聞いて従う」ことであり、具体的な行動を伴う。

ⓑその行動はまずは敵への愛として現れる（27―28節）。ここでの「敵」は教会の迫害者を指しているだろう。なぜなら、27節の三行目以下で、敵が「あなたがたを憎む者」、「呪う者」、「悪く言う者」と言い換えられているからである。マタイ5章43・44節での「敵」は、「迫害する者」と並んで使われている。そのような敵に「良く行い、祝福を祈り」、彼らのために「祈る」ことが「愛する」ことである。

ⓒ愛はさらに積極的な行動を生み出す。頬を打つ者にはもう一方を「差し出し」、上着を取る者には下着をも「拒まず」、求める者に「与え」、奪い取る者から「取り戻そうとはしない」（29―30節）。愛は「与えること」でもある。

ⓓ敵（エクスロス）

㋐この語は形容詞として「憎まれている」（ロマ一一28）、あるいは「憎んでいる・敵意のある」を意味する（マタ一三28）。新約聖書では名詞として使われる用例がほとんどであり、「敵」を意味する。32回使われ、共観福音書での用例は16回であり（ルカ8、マタ7、マコ1）、ヨハネ文書では一度も使われていない。ごく普通には、敵は人間同士の間で、対立する相手を表す。「敵」は自分に害悪をもたらす者である（ロマ一二20）。だが、旧約聖書の用法と同じく、新約聖書の「敵」は、神や神に属する者に反対し、対立する勢力を表すことが多い（マコ一二36並行、使二35、ヤコ四4、黙一一5・12など）。

㋑ルカ6章27・35節（マタ五43・44を参照）で、イエスは「敵を愛せ」と呼びかけている。いずれの箇所でも、「敵を愛せ」という言葉は、神の国の到来を告げるイエスの教えの一部である。神は「恩を知らない者にも悪人にも、情け深く」（35節）、「悪人にも太陽を昇らせ、正しくない者にも雨を降らせる」（マタ五45）。「敵を愛せ」とは、敵をも愛せる神の支配が到来したという呼びかけであり、その支配に人を招く福音である。

③第一の柱「黄金律」（31節）

ⓐ「行ってほしいと人に望む通りに、あなたがたも行いなさい」。これは「黄金律」と呼ばれる勧めであり、人間同士の関係を律する根本的な態度である。しかし、イエスの口からこれが語られるときには、もはや人間的な倫理で終わりはしない。神との関わりに基づく勧めである。

④愛するということ（32―35節）

ⓐこの小段落の前半部（32―34節）では、どの節の文章も同じ構成（条件文→修辞的疑問文→理由文）をもっている。愛してくれる者を愛するとか、善いことをしてくれる人に善いことをするとか、返済を期待して貸すということなら、「罪人たち」も実行している。ここでの「罪人たち」

は神を信じられない人のことである。

ⓑ後半部（35節）では、冒頭に置かれた「しかし」が示しているように、神を信じる「あなたがた」に「罪人」以上の振る舞いが呼びかけられる。過去に「罪人」であったあなたがたがイエスの十字架によって贖われ、神の憐れみに触れたのであるから、神の愛の高みを目指すべきであり、そうすることができる。この節で神を「至高者」と呼んだのは、信じる者をこの高みへと招くためだろう。

Ⓒ親切な（クレーストス）

㋐「役に立つ・目的に適った・良い」を意味する形容詞。新約聖書には、7回の用例がある。事物に使われる場合、「柔らかい・優しい・楽な・心地よい」を意味し、人物に使われると、「親切な・愛情の深い」を意味する。

㋑エフェソ 4 章32節はキリスト者としての生き方を教えて、互いに「親切に」しなさい、憐れみの心で接しなさい、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい、と述べる。ルカ 6 章35節では神に使われ、神は恩を知らない者にも、悪人にも「親切な・情け深い」方だと述べて、敵への愛の業を呼びかけている。1ペトロ 2 章 3 節でも神に使われ、主が「恵み深い方」だと知ったのだから、この主のもとに来るようにと呼びかけることによって、異邦人の間にあって迫害されている教会を励ましている。

⑤第二の柱「慈悲深い神」（36節）

ⓐあなたがたの慈悲深さは、父の「慈悲深さ」から来る。神から離れて、敵を愛そうとしても、徒労に終わる。神へと近づき、その愛に触れるとき、敵を愛することが許され、その力が与えられる。

⑥与えるということ（37―38節）

ⓐこの段落の前半部（37―38節二行目）では、否定の命令形を二度（「裁くな」、「罪に定めるな」）述べた後に、肯定の命令形を二度（「赦しなさい」、「与えなさい」）述べている。命令形の後に、それぞれ「そして」で始まる平叙文が続くが、そこでの動詞はすべて受動形である（「裁かれないだろう」など）。これらの受動形は神の行為を婉曲的に示す受動形であるから、裁かず、罪に定めず、赦し、与えるのは神である。神の近くにいる者は人を裁かずに、赦し、与えることができる。人を裁かずに赦せるかどうかは、自分と神との距離を示す物差しとなっている。

ⓑ後半部（38節三行目以下）では、あなたがたが量られる「量り」がテーマになっている。恵みを与える神は、量り（枡）の中味を「押し下げて」満たし、さらに「揺すって」すき間をなくし、そこに「溢れ出る」ほどに入れる。「与える」者は、それほどの豊かさを「与えられる」。

⑦敵をも愛せる大きな恵みと愛

ⓐ神は、神を信じない「敵」のために御子を送り、ご自分と和解させてくださった（ロマ五10）。この神の愛に気づくなら、敵をも包む神の憐れみに生きることになる。敵を愛することは義務ではない。むしろキリスト者は、敵をも愛せる大きな恵みと愛の中に生かされている。

ⓑイエスは「敵を愛し、あなたがたを憎む者に良く行いなさい」と教えている。キリスト者の行動の「良さ」は、神の「慈悲深さ」を映すものである。神がイエスを通して示した愛を見つめるとき、人は新しい生き方へと向かう者となる。